優秀賞

子どもを見る眼

宮城県　遠藤　利美

中学校の教員一年目。初めての担任として一年B組を受け持つことになった私は、子どもたちが可愛くて仕方なく、甘やかし、十分な生活規律を身につけさせることができないでいました。入学当初、「中学校生活は楽しい」と喜んでいた子どもたちの生活は乱れ、トラブルが続き、荒れていきました。頻発する事件に振り回される非力な担任への生徒の冷ややかなまなざし、生徒の暴言と感情的な指導の応酬…こんな毎日が続き、子どもたちと私の関係は険悪になり悪化の一途をたどりました。生徒を可愛く思う気持は全くなくなっていました。生徒が夢に出て来てはうなされる、文字通り悪夢のような日々でした。

夏の終わり頃、そんな私を見かねたのか、当時定年直前だったO先生が、「遠藤君、最近生徒を叱ってばかりいないかい？子どもは良いところを認められて、ほめられて初めて成長するものだよ。生徒をもっとほめてみなさい」とアドバイスしてくれました。

「この子たちのどこにほめるところが？」自問自答の毎日でしたが、ある時、教卓から子どもたちの姿をぼんやり見ていると、Aさんが床に落ちていた友だちの筆入れを拾ってあげたのが目に入りました。「おっ？」と思い、「ありがとう。優しいね。」と声を掛けると、Aさんははにかんだ笑顔を見せました。「認めてほめるってこういうこと？」自分の中で何かが変わりました。その時を境に、子どものたちの「いいなあ」と思える行動がどんどん目に飛び込んでくるようになったのです。教室のごみを人知れず拾ってゴミ箱に入れる子、自分から率先してバケツに水を汲んできてくれる子、元気に返事ができる子、欠席した生徒にノートを見せてやる子…気が付くと教室の中はほめることで溢れていました。

それからは、みるみるうちに子どもたちとの関係も改善していきました。あの時の経験は、私にとってその後の楽しく充実した教員人生への大きな分岐点だったのです。